

創設50周年記念国際会議の開催にあたって

歴史地理学会は、2007年に第50回大会を迎えた。その記念事業として記念誌の刊行とともに、国際会議を実施した。国際会議は「文化景観と環境の歴史地理学－歴史地理学の現在と未来－」と題して、2007年9月8日から9日にかけて日本大学経済学部において開催し、9月10日には東京をめぐる巡検を行った。この特集号は、その国際会議の報告である。

ところで、第二次世界大戦後、経済の成長や企業の海外進出などによって、日本の国際化は着実に進展してきた。地理学界でも1980年に国際地理学連合・国際地図学協会の東京大会が開催された頃から、海外調査や国際的研究集会の開催、あるいは外国での国際会議への参加などが次第に盛んになったように思われる。ここ20年ほどの、いわゆるグローバル化の時代には、その傾向は著しく進展し、地理学もあらゆる面で国際化に晒されるようになった。しかし、歴史地理学会は、その着実な発展にもかかわらず、国際化という点では、他の地理学の分野と比べてみても、後塵を拝してきたのが実状であろう。青木栄一委員長のもとでの歴史地理学会50周年記念事業企画立案特別委員会が、2005年10月に「学会の外部ならびに海外に対して、歴史地理学の社会的役割をアピールするような国際会議の開催」をまず第一に答申されたのは、このような事情に鑑み、何とか局面の打開をはかる努力を求められたものと思う。

それに対して我々は、松村祝男常任委員長を委員長とする記念事業実行委員会のもとに国際会議実行委員会を設け、国際会議開催の準備を重ねてきた。その際、特別委員会の答申の趣旨を尊重し、まず二つの点に関して意思統一を図った。一つは、この国際会議が各国の歴史地理学の実状の一端や先端を学ぶば

かりでなく、お呼びした先生方との長期的な交流を深めて、とくに若手研究者が今後、世界に進出し、日本の歴史地理学の国際化を進める契機になれば、ということであった。そのため、比較的若くて、第一線で精力的に活躍している先生方を招聘するよう心がけた。残念ながら、発表を予定していたUCLAのカーニー氏が都合によって来日できなかったが、ペーパーを寄せてくれた。もう一つは、中国・韓国の近隣諸国ばかりでなく、他のアジア諸国を含めて、世界との交流を活発にしたいということであった。とくに近代以降には日本全体の欧米志向と軌を一にして、我々地理学に携わる者でさえ、アジア諸国への関心やアジア諸国との交流が、一部の研究者を除いて、全体的に少なすぎたように思う。

国際会議のテーマは、文化景観と環境の歴史地理学に定めた。景観や環境は、実際、長い間にわたって地理学あるいは歴史地理学の重要な研究対象であり続け、その代名詞的存在となってきた。それゆえ、多くの国で地理学関係者が関心を共有し、歴史地理学的アプローチの意義や有効性を主張しやすいと考えたからである。環境問題、持続的社会の維持、世界遺産、景観法といった今日的キーワードを持ち出すまでもなく、それらの重要性は今日でも変わりが無い。しかし、環境や景観はさまざまな意味を含む言葉であり、その内容も変わりつつある。そこで話題があまり拡散しすぎないように、第1セッション「東アジアの都市景観」、第2セッション「農村景観の形成」、第3セッション「文化景観の歴史地理学的評価と保全問題」という大枠を考え、そのテーマにふさわしい研究者の招聘に努めた。それぞれのセッションのねらいについては、各セッションの責任者によってまとめられているが、当初のねらいとして

は、第1セッションでは古代中国文明の影響下で発達してきた都城景観の特徴、その地域的差異、西欧化のなかでの変質などを、第2セッションでは農村景観や社会の特徴、とくにアジアの棚田からデルタに広がる稲作景観などを、第3セッションではヨーロッパ各国の文化景観保全とその実践にまつわる問題、あるいは各国・各地域の文化景観評価とアイデンティティとの関連などを議論できたと考えた。研究者招聘の難しさなどから、若干の紆余曲折もあり、全てが予定通りとはいかなかったが、おおよそ当初の予定に沿って会議を進行させることができたと思っている。

規模の小さい歴史地理学会では、このような大きな国際会議の開催は難題と思われたが、大会実行委員をはじめとする多くの方々の努力で、何とか無事終了することができた。会員の力の結集によって、大きな可能性が開かれうることを、改めて学ぶ場となったような気がする。とくに国際会議開催の前線部隊長として企画立案・準備などに中心的に携わった吉田敏弘・小野寺 淳両氏の尽力に感謝したい。

2008年1月

石井 英也